

Metaphors We *Don't* Live By

—現代英語母語話者は by の時空間メタファーを使って生きているか—

平沢慎也

hiralingual1026@gmail.com

キーワード： 前置詞 時空間メタファー 使用基盤モデル 構文知識

要旨

現代英語において、前置詞 by の時間用法の一部と空間用法の一部を並べて観察すれば、そこに時空間メタファーの関係を見て取ることは確かに可能である。しかし、だからといって現代英語母語話者が by の時間義を使用するたびに、by の空間義についての知識を時間領域にマッピングしている（発話の場でそのような計算を行っている）のだということにもならなければ、話者は by の時間用法を記憶してはいないのだということにもならない。むしろ、by の実例の一つひとつをつぶさに検証すれば、話者が時間用法の by、空間用法の by について様々な個別知識を持っていると考える方が自然であることが分かる。本稿は、この結論が正しいことを、〈時の過ぎ去り〉用法と〈人物・物体の過ぎ去り〉用法を比較することにより確認する。この二つの用法はとても似ており、by の種々の用法の中で、時空間メタファーの計算がなされているように見える度合いが最も高い二用法だと言えるだろう。しかしこれらでさえ、細かく検証すれば、時間用法と空間用法それぞれに特有の性質があることが明らかになる。こうした性質は、時間用法の知識が空間用法の知識から独立したものであって、そこから発話時に導かれたものではない可能性を示唆する。従って、「発話の場でのメタファー計算」という仮説は、少なくとも by に関して言えば、説得力に欠ける。

1. はじめに：メタファーと使用基盤モデルの関係

本稿は、「英語母語話者が前置詞 by の時間用法を今彼らが使っているような形で使えているのはどうしてか」という問に対する答えとして、(2)が正しく(1)は間違っていると主張する。

- (1) 話者は、by の〈空間〉用法について持っている知識をメタファーに基づいて〈時間〉という別領域に応用するような計算を、発話のたびに行っているから
- (2) by の〈空間〉用法についても〈時間〉用法についても細かい個別知識を持っているから

by についての具体的な議論に入る前に、認知言語学という分野が言語の知識（およびその習得）をどのように捉えているかを紹介しておきたい。メタファーについてはその中で説明する。

認知言語学は、言語の知識（およびその習得）に関して、使用基盤モデルという言語モデルを想定している。使用基盤モデルでは、話者は、新しく触れた表現を過去に触れた表現との類

似性に基づいてカテゴリー化・グループ化し、記憶する (Bybee 2006, 2010; Taylor 2012)。そのグループ内の表現は、何らかの共通性を持つため、話者に抽象化するかわちスキーマの抽出を促す。(たとえば、pull him by the leg, drag her by the arm, catch me by the wrist, grab the cup by the handleといった表現に触れた話者は、[掴む系VP+by+the+部位NP]といったスキーマを抽出するだろう。)抽出されたスキーマは、新たに出会った別の表現や、新たに抽出した別のスキーマと共通性を持つかもしれない。その場合には、既に抽出したスキーマと新しい表現ないしスキーマから、さらに上位のスーパースキーマが抽出される可能性がある。(たとえば、Hirasawa (2011)と平沢 (2013)の提示しているデータから考えると、既に[掴む系VP+by+the+部位NP]というスキーマを抽出した話者が、push the prisoner along by the shoulder「肩をドンドンと押してその囚人を移動させる」やbalance the knife by the point on my palm「ナイフを手の平の上で先端で立たせてバランスをとる」といった表現に出会った場合、[位置をコントロールする系VP+by+the+部位NP]というスーパースキーマを抽出する可能性がある。)このようにして、下位の具体的な表現ないしスキーマから上位の抽象的な文法が構築されていく中で、その文法構築の材料となった個別具体的な表現が記憶から直ちに抹消されるということはない。(たとえば、話者が[位置をコントロールする系VP+by+the+部位NP]というスーパースキーマを抽出した途端に、その抽出の材料となった[掴む系VP+by+the+部位NP]というスキーマやdrag ... by the armやcatch ... by the wristなどの具体的表現を忘れてしまうということはない。)言わば「ルール」(抽象的なもの)と「リスト」(具体的なもの)の共存を許すのが使用基盤モデルなのである (Langacker 1987: 29)。リストにある表現がルールに則っているならルールさえ覚えていれば十分であり、リストの表現を覚えたままにしているのは無駄であり余剰的であるわけだが、その余剰性を許す言語モデルが使用基盤モデルなのだ。覚えた表現の全てを、いちいちルールに則って組み立て直すことは想定しない。たとえて言えば、加減乗除のルールを本質的に理解した大人でも、掛け算九九の結果のリストは全て覚えたままにしておき、いちいち8×9が72であることを計算により導き出そうとはしないことと似ている。

生まれた後に経験した物事を記憶し、そこに類似性を発見し、抽象化を行う(その際に抽象化の元となった表現も記憶から消さずに取っておく)という、認知言語学が想定しているプロセスは、(a) 言語に限らず領域横断的に見られる、(b) 後天的かつ (c) 余剰的 (c) ボトムアップ型の認知プロセスであるという四点において、生成文法の想定する (a') 言語固有の (b') 先天的で (c') 無駄のない (d') トップダウン型の言語獲得システムとは大きく対立する。

認知言語学が想定しているように使用経験・記憶・類似性・余剰性に重要な役割を担わせる見方が妥当であることを裏付ける強力な証拠が、言語習得の方面から提出されている (Diessel and Tomasello 2000; Diessel and Tomasello 2001; Tomasello 2000; Tomasello 2007; Kidd and Cameron-Faulkner 2008; Diessel 2013)。たとえば、関係節や埋め込みの定形節などの文法的な構造すら、はじめは、周囲の発話から具体的なフレーズ(文の断片)を拾い、まるでイディオムのように記憶・模倣して習得されていることが明らかになった。記憶したフレーズの種類が増

えていくにつれて徐々に抽象化・スキーマ化が進んでいき、最後には大人と同様に関係節や埋め込み文などを生産的に用いることができるようになる。

このモデルでは、覚えた表現を自分で使ってみる場面は、過去にその表現に出会った場面と全く同じでなければならないとは考えない。そもそも、ある場面と寸分違わず同じである場面に遭遇することなど、日常生活においてはまずありえない。自分の目の前にあるこの状況S1が、かつて出会ったあの状況S2と似ているという判断を話者が下したならば、S2を表すのに使われていた（もしくは自分が使った）表現を今このS1を表すのに使ってみる権利を、その話者は持っているのである（野矢2012: 第4章）。こうして言語表現の意味は拡張していきうる。本稿の本文ではこのような類似性に基づいた拡張運動をメタファーと呼ぶ（野矢2014）。この運動によって生じて定着した表現が、詩的言語にとどまらず、日常言語のいたるところに溢れていることを明らかにしたことが、Lakoff and Johnson (1980) *Metaphors We Live By*の最大の功績の一つである。

メタファーによる意味拡張が起こって間もないとき、拡張後の意味は「生まれたての新鮮な」もの（西村・野矢2013: 203）であるという印象を与える。そして拡張前後の意味の繋がりが強く感じられる。しかし、メタファー的拡張に限らず、何らかの要因で拡張後の用法の頻度が高まると、拡張前の用法を意識に立ち上らせることなく、拡張後の意味でその表現を使うことができるようになる（Croft 1998: 153; Bybee 2010: 48-50）。これがメタファーという運動にも成り立つのである（Taylor 2002: 499; 野矢 2011: 438）¹。たとえば、(4)の時間用法のintoは、元は(3)のような空間用法のintoとの類似性を意識したメタファー的拡張（この拡張運動を本稿では「時空間メタファー」と呼ぶ）により可能になったものと思われるが、現代の英語母語話者は(3)の知識を参照することなく(4)を使うことができるだろう。

- (3) [...] but he was far **into** the woods by then [...] (Paul Auster, *Timbuktu*)
 [...] その頃にはもう森の奥まで来ており [...]
- (4) We're 30 minutes **into** the second half.
 ただいま後半 30 分です。

ここで、記憶を重視する使用基盤モデルとの関連で重要になるのは、歴史的には空間用法の知識と時空間メタファーという運動の掛け合わせによって生まれた時間用法も、一度このよう

¹ そのような拡張後の表現は一般的に「死んだメタファー」「死んだ隠喩」と呼ばれている。

(i) 多くの場合、隠喩は、それが新しい意味を生み出す創造的な隠喩であればあるほど、その強い文脈依存性のゆえに、その場面に結びつけられた限定的な言語となるだろう。だが、中には反復的に使用されていく隠喩もある。例えば「目が釘づけになる」などは、もう数えきれないくらい使用されているだろう。そうした反復使用を重ねることによって、われわれはその文を単独で見ただけでその発話の文脈が理解できるようになる。たんに「目が釘づけになる」とだけ書かれてあったとしても、誰もそれで何かとても残酷な場面を考えたりはせず、ある程度長い時間にわたって何か注目すべきことが目の前で起こったのだという了解をもつだろう。さらに、そうして文脈独立的になるにつれて、元々の字義通りの意味（物理的に釘を打ち付けて固定する）は機能しなくなる。こうして、「目が釘づけになる」は、言語変化を引き起こす仕掛けとしてはその役割を終える。つまり、隠喩としての死を迎える。（野矢 2011: 438）

に定着し記憶されると、時空間メタファーという運動を介さなくても直接アクセスできるようになるということである。このことは神経科学の分野でも指摘されている。Kemmerer (2005) の実験結果を Pinker (2007) が分かりやすくまとめているので紹介する。

- (5) [...] it should come as no surprise to learn that even a metaphor as ubiquitous as TIME IS SPACE does not depend on the concept of time actually camping out in the neural real estate used by the concept of space. David Kemmerer has shown that some patients with brain damage can lose their ability to understand prepositions for space, as in *She's at the corner* and *She ran through the forest*, while retaining their ability to understand the same prepositions for time, as in *She arrived at 1:30* and *She worked through the evening*. Other patients showed the opposite pattern.

(Pinker 2007: 250)

[...] 「時間は空間である」(TIME IS SPACE) というごくありふれたメタファーがあっても、空間の概念と時間の概念の座が実際に脳の同じ領域にあるわけではないということは驚くに値しない。言語学者のデイヴィッド・ケメラーは、脳に損傷を負った患者の一部が、*She's at the corner* (彼女は角にいる) や *She ran through the forest* (彼女は森を走り抜けた) のような空間を示す前置詞を理解できなくなっても、*She arrived at 1:30* (彼女は一時半に到着した) や *She worked through the evening* (彼女は夜通し仕事した) のように同じ前置詞が時間を示す場合には理解できることを明らかにした。この逆のパターンを示す患者もいた。

(幾島・桜内 (訳) 『思考する言語 (中) : 「ことばの意味」から人間性に迫る』: 178-179)

この実験から、Kemmerer (2005)は、Lakoff and Johnson (1999: 166)などが提示している “the temporal meanings of prepositions are always computed through the on-line application of the TIME IS SPACE metaphor” (Kemmerer 2005: 798) (前置詞の時間的な意味は、「時間＝空間」というメタファーを発話の場で応用することによって、毎回導出されている) という考え方を誤りだとして退けている²。

これに反して認知言語学の研究論文によく見られるのが、言語表現は話し手のものの見方(たとえば時間と空間を類似したものとして見る見方)を反映しているという旨の記述だ。それに慣れ親しんでいる読者にとって、筆者の立場は少々納得がいきにくいかもしれない。しかし、空間前置詞の慣習化された時間用法に反映されている、時空間を類似領域と見なす見方は、現代の話者の見方ではなく、時間用法が生まれ始めたころの話者の見方であると考えられるべきである。神経科学的な実験が行われていなかったとしてもそうである。言語哲学的な議論の詳細については、以下に引用した論文を参照されたい。

² なお、「空間から時間へ」の逆にあたる「時間から空間へ」というマッピングが想定されていないのは、そのようなマッピングが通言語的に稀である(寺澤 1996: 129; Heine & Kuteva 2002) という理由、および、幼児は基本的に空間用法の方を先に習得する(Tomasello 1987) という理由による。

- (6) 言語の慣習的側面を考慮に入れるならば、「言語 L には言語 L を母語として使用している人たちの認識が反映されている」というのはおおざっぱな言い方にすぎず、より厳密には「言語 L の表現 E には、表現 E が発生した時点で言語 L を母語として使用していた人たちの認識が反映されている」と言わなければならない。(酒井 2013: 64)

現代英語を丁寧に記述した結果、ある表現の時間用法と空間用法にメタファー関係が認定できないと判明する場合もあれば、かろうじて認定できたとしてもそのメタファーを使って発話を行ってはいないと考えた方が妥当な場合もある。記述の結果によってはこうした結論を認めるような、柔軟な姿勢を持つべきである。「メタファーは日常的であり普遍的だ」という理論的抽象化が先行して、現代英語の記述を疎かにするようなことがあってはならない。しかしながら、前置詞byの研究ではその憂うべき事態が実際に発生してしまっている。以下で具体的に検証していこう。

2. byと時空間メタファー

2.1 時空間メタファーを指摘することすらできない、というケース

Rice et al. (1999)や嶋田(2013)などの研究で、(7)の空間用法のbyと(8)の時間用法のbyが時空間メタファーの関係にあるということが、細かな記述なしに指摘されている。

- (7) There are a few benches **by** the river. . . . (嶋田 2013: 28)
その川のそばに二、三のベンチがあり…
- (8) The church was well alight **by** the time fire crews arrived. (嶋田 2013: 28)
その教会は、消防隊員たちが到着したときには、すっかり火に包まれてしまっていた。

この二用法間に時空間メタファーは指摘できない。平沢(2014)の分析に基づけば、(8)の文意(の一部)は、「the time fire crews arrivedにおいて、The church was well alightという状態が成り立っている」である。(7)がこれの単純な空間版なのだとする、(7)の文意に「the riverにおいて、there are a few benchesが成り立っている」ということが含まれるはずだが、(7)の正しい文意は「the riverのそばにおいて、there are a few benchesが成り立っている」である。逆に、(8)が(7)の単純な時間バージョンなのだとする、(8)の文意は「the time fire crews arrived の時点の付近で、The church was well alight という状態が成り立っていた」となるはずだが、(8)の参照時はまさにthe time fire crews arrived の時点であって、the time fire crews arrived の時点の付近ではない(平沢 2014)³。ここに時空間メタファーを見て取るのは誤りであると断ぜざるをえない。

³ (8)の着火時点はthe time fire crews arrived よりも前であり、したがってthe time fire crews arrived の時点とはずれていることになる。このずれは、一見したところでは、(7)のthe river の位置とthere are a few benches の位置のずれに対応しているように思われるかもしれない。しかし、(8)のThe church was well alight は着火という変化

2.2 時空間メタファーを指摘することはできるが、発話の場でメタファーを利用しているとは言いにくいケース

2.2.1 時空間メタファーを指摘する

セクション2.2は、本稿の具体的な分析のメインとなる部分である。ここでは、一見時空間メタファーによって言語運用がなされていそうなbyの「過ぎ去り」用法を対象とし、そこですら、話者が持っている時間的過ぎ去り用法の知識と空間的過ぎ去り用法の知識の間には隔たりがあることを示す。

「一見時空間メタファーによって言語運用がなされていそう」という部分に関しては、次の(9)と(10)を比較されたい。

- (9) The passengers stayed in their seats, watching with fear as all their stops went **by**.

(Andrew Kaufman, *The Tiny Wife*)

乗客はみな席から立とうとせず、停留所が次から次へと通り過ぎて行くのを不安げに見つめた。

- (10) But in some ways, it's sadder as time goes **by** [...] (Emily Giffin, *Something Borrowed*)

しかし、時が過ぎるにつれてどんどん悲しさが増してくるところもあって [...]

(9)のbyと(10)のbyは、まず形の側面では、「～につれて」の意味を表す接続詞のasや動詞goとの共起という点で似ている。さらに意味の面でも極めてよく似ている。バスが前に進むと、中にいる人間から見た景色は、人間の横を通り過ぎて行くことになる。一方、人間が時間軸の上に立ち、未来に向かって進んでいくと、時間がその人間の横を、前から後ろに向かって過ぎ去っていくことになる(本多2011a, b)。ここに空間と時間の対応関係がきれいに見て取れる。時空間メタファーが指摘できるということである。

しかし、言語学者の目から見て時空間メタファーが指摘できるからといって、話者が時間義でbyを用いるたびに空間義のbyを踏み台として利用しているということにはならない。以下のセクションでは、(9)と(10)にあるようなbyがいかに個別的な知識(具体的には、空間的な過ぎ去りを表す[V by (NP)]構文の知識と、時間的な過ぎ去りを表す[V by]構文の知識)に基づいて使用されているかを見る。

2.2.2 空間的な過ぎ去りを表す [V by (NP)] 構文

byの空間的過ぎ去り用法を丁寧に記述しよう。(9)のような空間的な過ぎ去りを表すbyは、従

の時点を描いたものではなく(着火という変化は既に終えて)燃えている最中の状態を描いたものであるから、(7)と対応していない。もちろん、He turned in his homework by five o'clock. (彼は5時までに宿題を提出した)のような文では、He turned in his homeworkの時点とfive o'clockの時点にずれがあることになり、(7)との対応関係が存在することになるが、このように(状態ではなく)変化を描く動詞句と時間義のby句が共起する頻度は低く、時間義のbyの典型的な使用例とは言えない(平沢2014)。

来、(7)のような空間的近接性を表すbyと完全に同一視され、ただ一つ存在する抽象的・統一的な空間義の、一つの現われにすぎないものとして扱われてきた (Dirven 1993, Hanazaki 2005, Lindstromberg 2010, 嶋田2010, 嶋田2013)。しかし、実例を細かく検証すれば、この二つさえ別個の知識を参照して使用されていることが分かる。言い換えると、byが空間的な過ぎ去りを表すのに使われる場合には、話者は[V by (NP)]構文⁴の知識を参照している可能性が高く、「そばに」という抽象的な意味を表すbyと移動を表す動詞を結びつける構成操作を、発話のたびに行っている可能性は低いのである。

空間的な過ぎ去りのbyの具体的特徴を指摘していこう。まず、移動動詞を伴わない(7)のようなケースとは異なり、byの補部名詞句を省略することが容易に容認される。

(11a) He's waiting **by** the window.

彼は窓のそばで待っている。

(11b) *He's waiting **by**.⁵

彼はそばで待っている。

(12a) She saw them passing **by** the house.

彼女は彼らが家のそばを通過するのを見た。

(12b) She saw them passing **by**.

彼女は彼らがそばを通過するのを見た。

それどころか、省略される方が普通だと言ってよい。既読の小説27作品⁶を調べたところ、空間的な過ぎ去りを表すのにbyが使われている用例は合計で78件あり、そのうち補部名詞句が存在するものが26件、存在しないものが52件⁷あった。

次に過ぎ去りのbyは、近接性のbyと比べると、補部名詞句の種類も異なる⁸。上述の小説27作品を見てみると、近接性の用法では偏って頻度が高いwindow (222件中34件：15.3%)が、過ぎ

⁴ Taylor (2012: 124-127)にまとめられているように、言語学において「構文」(construction)という術語は様々な意味で用いられ、しばしば混乱の原因となる。ここでは、構成要素の形・意味の振る舞いから予測されない振る舞いをする言語表現のことを指す(Goldberg 1995)。

⁵ ただし、He's waiting close by.やHe's waiting near by.のようにbyの前に「近く」の意味の副詞を添えると容認度が上がる。この点については、興味を持っているもののまだ調査を行っていない。

⁶ Andrew Kaufman, *The Tiny Wife*; Daniel Wallace, *Big Fish*; Emily Giffin, *Something Blue/ Something Borrowed/ Baby Proof*; Eric Walters, *The Bully Boys*; F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*; J.D. Salinger, *The Catcher in the Rye*; Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go/ Nocturnes/ A Pale View of Hills/ The Remains of the Day*; Mitch Albom, *The Five People You Meet in Heaven/ The First Phone Call from Heaven*; Paul Auster, *The Red Notebook/ Sunset Park/ Invisible/ Travels in the Scriptorium/ Timbuktu/ City of Glass/ Ghosts/ The Locked Room/ Oracle Night/ Leviathan*; Raymond Chandler, *The Long Goodbye*; Rebecca Brown, *The Gifts of the Body*; V.S. Naipaul, *A Bend in the River*

⁷ ただし、うち1件は以下のように比喩的な用法である。

(i) If you don't want to see Lindy right now, if you want to let gold go floating **by**, okay, I understand your position.

(Kazuo Ishiguro, "Nocturne" from *Nocturnes*)

今リンディーに会いたくないなら、金がぶかぶか浮かんで過ぎ去っていくのを黙って見ていたいなら、まあいい、そういう立場も分かる。

⁸ この事実自体は嶋田(2013: 43)でも指摘されているが、彼は数的データを提示していない。

去りでは26件中0件(0.0%)であり、一方、前者の用法では頻度が低い[人間]⁹(222件中5件:2.2%)、house (2件 : 0.9%)が、後者ではそれぞれ26件中6件(23.0%)と4件(15.3%)で、1位と2位であった。

第三に、byの空間的過ぎ去り用法では、TRがLMに近い¹⁰ことが必要条件にならないという点
が、(7)のような空間的近接用法とは決定的に異なる。

- (13) Far to the north, he could hear the occasional whine of rubber tires on pavement. From the sounds of distant vehicles speeding by, it probably meant the highway wasn't all that far, especially not as the crow flies. (COCA)

はるか北の方で、ゴムタイヤが車道にこすれてキキッと鳴るのがしばしば聞こえた。遠くの車がスピードを出して次々と通り過ぎて行く音からして、おそらくその道路はそう遠くないのだろう。特に、直線距離で考えれば。

- (14) She listened, transfixed by the music of a carnival group passing by in the distance. (COCA)
彼女は耳を澄ました。遠くを通過するカーニバルの集団が奏でる音楽に凍りついた。

(13)と(14)でbyのTRはそれぞれ vehicles と a carnival group、LMはそれぞれ he と she の居場所である。いずれの例文でも、TRがLMから遠い距離にいることが明示されている(下線部参照)。このようなことは、(7)のような空間的近接用法では生じようがない。次の用例は、夏目漱石『三四郎』を日本文学者の Jay Rubin が翻訳した英文からとった。

- (15) You've never seen Mount Fuji. We go by it a little farther on. Have a look. It's the finest thing Japan has to offer, the only thing we have to boast about. (Sōseki Natsume, *Sanshirō*)
まだ富士山を見た事がないでしょう。今に見えるから御覧なさい。あれが日本一の名物だ。あれよりほかに自慢するものは何もない。(夏目漱石『三四郎』)

これは、主人公の三四郎が、九州から上京してくる列車の中で哲学者の広田先生に言われる台詞である。TRは電車に乗っている we で、LMは富士山である。当時の東海道線は(熱海から函南の丹那トンネルがなかったため)現在で言うところの御殿場経由で走っており、富士山に最も接近する地点をとっても、富士駅か御殿場駅付近である¹¹。(7)タイプのbyが使われるような、TRとLMの間に目立った物体が何も挟まらないような関係¹²を Jay Rubin がイメージしていたとは考えにくい。従って(15)のbyが(7)のbyと全く同じ近接性を表していると主張しよう

⁹ [人間] はここでは人称代名詞や固有名詞などをまとめた意味カテゴリーを指す。

¹⁰ 本稿では、認知言語学の慣習にならい、空間前置詞によって位置づけられるものを TR (トラジェクター)、位置づけの参照物として機能するものを LM (ランドマーク)と呼ぶ。たとえば He is passing by the house. では He が TR、the house が LM にあたる。

¹¹ 筆者の知人で鉄道事情に詳しい富岡顕信氏による。

¹² 目に見えるものが間に挟まっていると、byは容認されなくなる。たとえば左から順に John、Mary、Susan と並んでいるときに John is standing by Susan.とは言わない。

とすると、少々心許ない。

空間的過ぎ去りの *by* の第四の特徴として、一連の移動の中の、TR が LM に近づいていく局面（以下、「前半局面」と、TR が LM から離れていく局面（以下、「後半局面」）の片方だけが焦点化することが頻繁に起こることが挙げられる。まず前半局面だけが焦点化した事例として(16)を見よう。

- (16) I just thought I'd get you a little present. I saw it in the window as I went **by**, so I thought of you and how you were always wanting one. (Roald Dahl, *Dip in the Pool*)

君にプレゼントを買ってあげようと思ったんだ。通りがかりにショーウィンドウに飾ってあるのが見えてき、それで君のことを思い出して、ああそういえばいつも欲しい欲しい言っていたなと思ってき。

ショーウィンドウを通りすぎてしまっはプレゼントを購入できない。従ってこの文脈では、ショーウィンドウに差し掛かるまでは前半・後半両局面を含んだ移動全体を行うつもりだったのだけれども、結果として前半局面だけで一度完結してしまった、と考えるのがよいだろう。過ぎ去りの移動の前半・後半両局面が背景には存在するのだけれども、焦点化しているのは前半だけということになる。

今度は後半局面だけが焦点化した例を見てみよう。Paul Auster の *Leviathan* の一部である。まず該当箇所にいるまでの経緯を簡単に説明する。サックスという男性がリリアン・スターンという女性の家を訪ねるが、リリアンは留守にしている。そこで彼はリリアン宅の玄関の階段で、帰りを待つ。

- (17) [...] he parked himself on the front steps and waited for Lilian Stern to appear.

(Paul Auster, *Leviathan*)

[...] 玄関前の階段に陣取ってリリアン・スターンが現れるのを待つことにした。

(柴田元幸 (訳) 『リヴァイアサン』)

何時間でも待つ。持ち場を決して離れない。

- (18) At one o'clock, Sachs temporarily abandoned his post to look for something to eat, but he returned within twenty minutes and consumed his fast food lunch on the steps. (Paul Auster, *Leviathan*)

一時になると、サックスは食べ物を調達しにつかのみ持ち場を離れたが、二十分後にはもう戻ってきて、階段に座ってファストフードの昼食を食べた。

(柴田元幸 (訳) 『リヴァイアサン』)

やがて、リリアンが車で帰ってくる。次の箇所は、駐車場の位置に注意して読んでほしい。

(19) He opened his eyes and saw the car standing in a parking space directly across the street.

(Paul Auster, *Leviathan*)

目を開けると、車は通りの真向かいの駐車スペースに停まっていた。

(柴田元幸 (訳) 『リヴァイアサン』)

駐車場は、家の玄関から見て、通りを挟んで真向かいにあることになる。(19)の箇所の数ページ後、この駐車場に車を止めた記者ミュラー（リリアンを取材するために来たのだが、サックスによりその取材は断られる）が車に乗り込み帰るのを、玄関に立っているサックスが見送るという場面がある。ここで空間的過ぎ去りの *by* が使われる。

(20) The reporter crossed the street, climbed into his car, and started the engine. As a farewell gesture, he raised the middle finger of his right hand as he drove **by** the house [...](Paul Auster, *Leviathan*)

ミュラーは道路を渡って、車に乗り込み、エンジンを始動させた。別れの挨拶に、家の前を通りすぎるときに右手の中指を突き立てていった [...]

(柴田元幸 (訳) 『リヴァイアサン』)

記者ミュラーの車 (TR) は、リリアン宅 (LM) の前の道路を渡ったところにある駐車場を出発して、その道路の上を走って去っていくのであるから、過ぎ去りの移動経路の後半局面 (TR が LM から離れていくプロセス) だけが焦点化したケースと言える。このようなことが起こりえるということは、移動動詞 *drive* と(7)の空間的近接性を表す *by* とを組み合わせるだけでは予想できない。

空間的過ぎ去りの意味で *by* が使われた場合の第五の特徴として、ある地点から別の地点へのストレートな移動¹³を表すという点が挙げられる。本来ストレートな移動を表すわけでない動詞まで、そのような移動を表すように修正されて解釈されるのである。たとえば動詞 *wander* (特に目的なく移動する) を例にとろう。特に目的のない移動なので、その経路は逆行・蛇行・無意味な一時停止などに溢れていて構わない (むしろ、その方が自然かもしれない)。(21)の結果として Quinn が描いた図 (図 1) を見てもそれがよく分かる。なお、図 1 は筆者が描いたものではなく、小説自体に掲載されたものである。

(21) For no particular reason that he was aware of, Quinn turned to a clean page of the red notebook and sketched a little map of the area Stillman had wandered in. (Paul Auster, *City of Glass*)

自覚しているいかなる理由もなしに、クインは赤いノートの新しいページを開いて、ス

¹³ ここで言う「ストレートな移動」とは、方向転換や蛇行、無意味な一時停止などが無い移動のことを指す。数学的に厳密な意味での直線移動を表すわけではない。

ティルマンが徘徊した区域の簡単な地図を描いてみた。(柴田元幸 (訳) 『ガラスの街』)

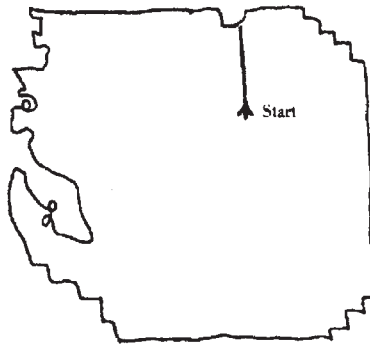


図1 (21)で Quinn が描いた図

ここで、過ぎ去りとの関連で重要な例(22)を見よう。これはTVドラマ『刑事コロンボ』からとった例である。コロンボが飛行機事故の現場をうろうろと歩き回っているのが現場取材のカメラに映り込んでしまい、カメラマンが次のように言う。

(22) This fella's been wandering around in the shot, and it's getting very distracting.

(*Columbo*, Episode 24, Swan Song)

さっきからそいつがうろうろしてるのが映り込んでるんだよ。すごい気が散っちゃってさ。

ここで重要なのは、コロンボの歩き方は方向転換や蛇行、一時停止を含みながらもカメラ画面左から右へ向かって「過ぎ去って」いることである。さらに、墜落した飛行機の「側面」の「すぐそば」を歩いている。従って、「byの空間的過ぎ去り用法は、移動動詞と空間的近接性のbyを、発話の場で組み合わせることによって生じている」という考えが正しいならば、(22)の場面で *wander by* も許容されるはずである。しかし、この状況で *wander by* と言うのは不自然である。コロンボの方向転換や蛇行、一時停止を含んだ歩き方が、*wander by* には合わないのである。*wander by* の使用が自然に響く移動は、特に目的のない移動でありながらもまっすぐ通過するような移動である。たとえばTVドラマ『フルハウス』のとあるエピソードでは、Jesseが赤ん坊のMichelleを腕に抱え、右から左へスッと移動させながら、次のように言う(Michelleを牛に見立てていることに注意)。

(23) A stray cow wanders by.

(*Full House*, Season 2, Episode 13, Working Mothers)

迷子の牛がふらーっと通り過ぎます。

(21)から分かるように、wander 自体は「逆行や蛇行、無意味な一時停止」を許す（それどころか、自然と連想させる）。にもかかわらず、wander by が表す過ぎ去りでは、それが許されず、ストレートな移動という解釈に限定される。さらに、そもそも移動を表さない snort や flash などといった動詞も空間的過ぎ去りの by と共起することがあり、その場合には snort や flash が（様態付きの）移動を表すように調整されて解釈される。

(24) I sat back and watched a bus snort by. (David Gordon, *The Serialist*)

私は動かず、バスがゴーッという音を立てて走り去るのを見つめた。

以上の五点の特徴を捉えるには、[V by (NP)] という形式を持ち「LM から離れた地点 A を始点とし、LM に近い地点 B を通って、LM から離れた地点 C へとストレートに移動する」という意味をプロトタイプ的な意味とする構文の知識を想定するしかないだろう。「プロトタイプ的」としたのは、(13)-(15)で見たように、「LM に近い地点」を通っているとは言えない場合もあるからである（ただしその場合でも、通過地点 B は A や C に比べれば LM に近い）。話者がこの構文を知っているということのうちには、この構文にどのような動詞や補部名詞句が現れることが可能かを知っていることが含まれる (Taylor 2012: 282)。たとえば、通過を表す典型的な移動動詞である pass や、意味の指定が比較的少ない（従ってもっと広く移動動詞の典型的と言える）go や walk が [V by (NP)] に現れることが多い（それぞれ、26 件中 8 件、4 件、4 件）ということ。ストレートでない移動動詞 (e.g. wander) が V に入ることもあるが、その場合にはストレートな移動に調整されて解釈されること。そもそも動詞単体では移動動詞とすら言いにくい snort や flash などこの構文に参加でき、その場合には移動を表すように調整されて解釈されること。こうした詳細を話者は記憶しているのである¹⁴。

2.2.3 時間的な過ぎ去りを表す [V by] 構文

前のセクションでは、by が空間的な過ぎ去りを表して用いられる時には、話者は[V by (NP)] 構文の知識を参照しているのであって、動詞の意味と前置詞 by の意味を組み合わせる構成的な計算を発話の場で行っているのではない、ということを主張した。本セクションでは、この[V by (NP)] 構文の知識を認めた上で、その知識を時間領域に移し替えても、時間的な過ぎ去りを表す by の知識に等しくならない（時間的な過ぎ去りを表す[V by]構文の知識というまた別の知識を話者は持っている）ということを主張する。

¹⁴ 数的データを得るための手法を編み出すことができていないのだが、道案内で「郵便局を通りすぎて…」というときに go by the post office と言うことは稀であり、go past the post officeの方が普通である。こうした違いも母語話者は判断できる。「当該表現を発するのは主にどのような状況にいる話者か」に関する知識も母語話者は持っているのである。日本語で例を出すと、「元交際相手の男」という表現は主に報道の場で発するものであり、友人とカフェでケーキを食べながら発するものではないという知識を、多くの話者が持っているのではないだろうか。

まず、上述の小説 27 作品で時間的な過ぎ去りを表す *by* は 96 件生起し、そのうち *by* の補部名詞句が明示されているもの(たとえば *Three weeks went by us* のような例)は 1 件もなかった。一方、2.2.2 で見たように、空間的な過ぎ去りを表す[V *by* (NP)] 構文ではその用例の三分の一(78 件中 26 件)において補部名詞句が明示されていた。もし話者が時間的な過ぎ去りの *by* を使用するとき、空間的な過ぎ去りの *by* からの転写をその場で行っているのだとしたら、どうして補部名詞句が明示される例が一例もないのか、説明がつかない。

また、「話者が時間的な過ぎ去りの *by* を使うことができるのは、発話の場で時空間マッピングを行っているからだ」という論理が正しいのだとしたら、時間的な過ぎ去りの *by* と最も高頻度で共起する動詞は、空間的な過ぎ去りを表す[V *by* (NP)] 構文(の補部名詞句が存在しないケース)の動詞スロットを埋める動詞で最も頻度が高いもの—すなわち *pass*—のはずであるが、これは言語事実と反する。上述の小説 27 作品で時間的な過ぎ去りを表す *by* と *pass* が共起した例は 96 件中ひとつも見つからなかった¹⁵。

今度は、時間的な過ぎ去りを表す *by* と共起する動詞の主語に注目してみよう。主語として *time* は極めて一般的である(特に例文(10)にある *as time goes by* は、COCA で 151 件見つかることから考えて、熟語として丸ごと記憶されている可能性がある)が、それに対応する空間版の *place* は、空間的な過ぎ去りを表す[V *by* (NP)] 構文の主語になることはない。

(25) *As place goes *by*, a bus ride becomes more and more boring.

場所が進むにつれて、バスに乗っているのはどんどん退屈になっていくものだ。

また、時間的な過ぎ去りの主語に、Dixon (2005: 407)で言うところの「時間単位」(units of time)を表す名詞—つまり *hour, day, night, week, month, season, year, second, minute, decade, century*—を含め、*time* や *afternoon* など、時間を直接的に指示する名詞が来ることが多い。そうでない名詞が主語に立つ頻度は非常に低く、上述の 96 件中、*whole chapters, whole lessons, a whole verse* の 3 件のみであった¹⁶。この言語事実は、空間側からのマッピングだけでは予想できないだろう。なぜなら、空間的な過ぎ去りを表す[V *by* (NP)] 構文の主語の位置に、(時間側で言えば *hour* や *minute* に対応するはずの) *mile* や *kilometer* が立つのは不自然だからである。

最後に、空間的な過ぎ去りを表す[V *by* (NP)] 構文では(必須ではないものの)プロトタイプ

¹⁵ *by* と共起しない *pass* が時間的な過ぎ去りを表している例は検出された。

(i) *Months passed. Sully couldn't work.* (Mitch Albom, *The First Phone Call from Heaven*)

何ヶ月も経った。サリーは働けなかった。

(ii) *Years passed. The girl grew up.* (Paul Auster, *The Red Notebook*)

何年も経った。少女は大人になった。

¹⁶ こうした例は空間的な過ぎ去りを表す[V *by* (NP)] 構文の事例としてカウントすべきなのかもしれない。

(i) *Whole chapters go by, and when he comes to the end of them he realizes that he has not retained a thing.*

(Paul Auster, *Ghosts*)

何章も過ぎていって、ふと気がつくと、頭の中には何ひとつ残っていないのだ。

(柴田元幸(訳)『幽霊たち』)

いずれにせよ、出来事を表す名詞が主語に立つ例が一つもなかったということにかわりはない。

を構成する要素として存在している TR と LM の近接性は、時間側の世界では何に対応するのだろうか。時間軸の上を進む人間と、その横を通り過ぎていくように見える years や time。この二者が近いとは一体どのようなことなのだろうか。あまりにも抽象的かつ複雑で、筆者のイマジネーションの及ばないことのように思われる。想像力の豊かな分析者は何かしら言うことができるのだろうか、その「何かしら」は「時間と空間のその美しい対応関係があるから時間用法が使えるのだ」という論理を成り立たせることに貢献するようなものでなければならない。しかし、これまで見てきたように、空間的な過ぎ去りの by と時間的な過ぎ去りの by には大きな隔たりがあり、望みは薄いように思われる。むしろ、話者は時間的な過ぎ去りを表す[V by]構文の知識を、空間的な過ぎ去りを表す[V by (NP)]構文の知識とは別に持っているのだと考える方が自然であろう。

3. 結語

英語の前置詞 by の時間用法と空間用法について、メタファーの関係が指摘できないケースがあることと、指摘できた場合でも、だからといって「空間用法の知識を利用して時間用法を生み出す計算を、発話の場で毎回行っている」ということにはならないということを論じた。むしろ、本稿で提示した言語事実が示唆する自然な結論は、話者は時間用法と空間用法のそれぞれに関する個別知識を持っているというものである。第1節で概観した言語の使用基盤モデルからすれば、矛盾なく受け入れられる結論である。

こうした個別知識の存在は、本稿のように言語事実の記述を丁寧に行っていれば、容易に浮かび上がってくるものである。にもかかわらず、by に言及している先行研究で観察が疎かにされてきたのは、一体なぜなのか。憶測に過ぎるかもしれないが、Lakoff and Johnson (1980)の影響力があまりに強く、「メタファーは普遍的だから言語事実もこうなっているはずだ」という思い込みが分析者の側に働いてしまっている可能性がある。そうすると、時空間メタファーが言語使用を可能にするほど強い力を持っていない事例を前にしても、そのことに気がつかないという事態が発生しうる。これは心理学者 Daniel Kahneman が言うところの「理論によって誘発された盲目」(theory-induced blindness)の一種である。

(26) [...] once you have accepted a theory and used it as a tool in your thinking, it is extraordinarily difficult to notice its flaw. (Kahneman 2011: 277)

[...] ある理論を一度受け入れて思考の道具として使ってしまうと、その理論の欠点に気がつくことは非常に困難になる。

妙な思考実験だが、時空間メタファーの考え方を学んだ英語学習者が、by の空間用法をしっかり勉強したとする。教師の側で細工をして、by の時間用法には全く触れさせないようにする。

この状況で英語学習者は、自分の頭で *by* の時間用法を生み出し、本稿で記述したような英語を話し始めるだろうか。as time goes by と言ってみたり、the weeks passed by をなるべく避けよう (passed だけで言おう) としたりするだろうか。このような想像を柔軟に働かせながら分析と記述を行うことが、時空間メタファーの理論を万能の武器として振り回してこじつけに走ってしまうことを防ぎ、この理論が力を発揮するところとそうでないところを見極める—theory-induced blindness を回避する—ことにつながるのだと筆者は考えている。

参考文献

- Bybee, Joan (2006) From usage to grammar: the mind's response to repetition. *Language* 82: 711-733.
- Bybee, Joan (2010) *Language, usage and cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William (1998) Linguistic evidence and mental representations. *Cognitive Linguistics* 9(2): 151-173
- Davies, Mark (2008-) *The corpus of contemporary American English: 450 million words, 1990-present*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coca/>.
- Diessel, Holger (2013) Construction grammar and first language acquisition. In Graeme and Hoffmann (eds.). *The Oxford handbook of construction grammar*, 347-364. Oxford: Oxford University Press.
- Diessel, Holger and Michael Tomasello (2000) The development of relative clauses in spontaneous child speech. *Cognitive linguistics* 11(1): 131-151.
- Diessel, Holger and Michael Tomasello (2001) The acquisition of finite complement clauses in English: A corpus-based analysis. *Cognitive linguistics* 12(2): 97-141.
- Dirven, René (1993) Dividing up physical and mental space into conceptual categories by means of English prepositions: In: Cornelia Zelinsky-Wibbelt (ed), *The semantics of prepositions: From mental processing to natural language processing*, 73-97. *Natural Language Processing* 3, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Dixon, R. M. W. (2005) *A semantic approach to English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hanazaki, Miki (2005) Toward a model of principled polysemy. *English Linguistics* 22: 412-442.
- Heine, Bernd, and Kuteva Tania (2002). *World lexicon of grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hirasawa, Shinya (2011) On the *joint* sense of the English preposition *by*. *Tokyo University Linguistic Papers* 31: 31-52.
- 平沢慎也 (2013) 「物理的介在物を補部に取る用法の英語前置詞*by*—可算性選択の原理」『東京大学言語学論集』34: 25-41.
- 平沢慎也 (2014) 「英語前置詞*by*の時間義」『言語研究』146: 51-82.

- 本多啓 (2011a) 「時空間メタファーと視点—生態心理学の自己知覚論をふまえて—」 『人工知能学会第2種研究会ことば工学研究会資料 SIG-LSE-B003: ことば工学研究会 (第37回)』 77-86.
- 本多啓 (2011b) 「時空間メタファーの経験的基盤をめぐって」 『神戸外大論叢』 62(2): 33-56.
- Kahneman, Daniel (2011) *Thinking, fast and slow*. London: Penguin Books.
- Kemmerer, David (2005) The spatial and temporal meanings of English prepositions can be independently impaired. *Neuropsychologia* 43: 797-806.
- Kidd, Evan. and Thea Cameron-Faulkner (2008) The acquisition of the multiple senses of *with*. *Linguistics* 46(1): 33-61.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar*, vol.1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1999) *Philosophy in the flesh: The embodied mind and its challenge to Western thought*. New York: Basic Books.
- Lindstromberg, Seth (2010) *English prepositions explained*. Revised edition. Amsterdam: John Benjamins.
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室—哲学者と学ぶ認知言語学』 東京: 中央公論新社.
- 野矢茂樹 (2011) 『語りえぬものを語る』 東京: 講談社.
- 野矢茂樹 (2012) 『心と他者』 東京: 中央公論新社.
- 野矢茂樹 (2014) 「認知と言語—認知言語学者、西村義樹氏をお迎えして—」 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部「高校生のための金曜特別講座」2014年10月3日. 東京大学.
- Pinker, Steven (2007) *The stuff of thought*. New York: Viking. 幾島幸子・桜内篤子 (訳) 『思考する言語 (中) : 「ことばの意味」から人間性に迫る』 東京: 日本放送出版協会. 2009年.
- Rice, Sally, Dominiek Sandra and Mia Vanrespaille (1999) Prepositional semantics and the fragile link between space and time. In M. Hiraga, Chris Sinha and S. Wilcox (eds.). *Cultural, psychological and typological Issues in cognitive linguistics*, 108-127. Amsterdam: John Benjamins.
- 酒井智宏 (2013) 「認知言語学と哲学—言語は誰の何に対する認識の反映か—」 『言語研究』 144: 55-81.
- 嶋田裕司 (2010) 「前置詞byの意味—nearの意味と対比して—」 『群馬県立女子大学紀要』 31: 37-44.
- 嶋田裕司 (2013) 「前置詞byの意味—ひとつの意味を求めて—」 『群馬県立女子大学紀要』 34: 27-38.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2012) *The mental corpus: How language is represented in the mind*. Oxford: Oxford University Press.
- 寺澤盾 (1996) 「意味の変化」 池上嘉彦 (編) 『英語の意味』 東京: 大修館書店.

- Tomasello, Michael (1987) Learning to use prepositions: A case study. *Journal of Child Language* 14: 79–98.
- Tomasello, Michael (2000) First steps toward a usage-based theory of language acquisition. *Cognitive Linguistics* 11(1): 61–82.
- Tomasello, Michael (2007) Cognitive linguistics and first language acquisition. In Geeraerts and Cuyckens (eds.). *The Oxford handbook of cognitive linguistics*, 1092–1112. Oxford: Oxford University Press.

Metaphors We *Don't* Live By: Do Contemporary Speakers of English Exploit Spatio-temporal Metaphor When Using the Preposition *by* in Its Temporal Senses?

Shinya Hirasawa

hiralingual1026@gmail.com

Keywords: preposition, spatio-temporal metaphor, usage-based model, construction

Abstract

One could recognize a spatio-temporal metaphor between some spatial and temporal uses of the preposition *by* in present-day English. But this does not mean that contemporary speakers map their knowledge of the spatial uses onto the domain of time every time they use temporal *by* (i.e. that they conduct a relevant online computation in each utterance), or that the temporal uses are not entrenched in their memory. Rather, a close inspection of each individual use of *by* reveals that they, more plausibly, have a vast range of highly specific knowledge on both spatial and temporal uses. The present article confirms this conclusion by comparing the spatial-passage use of *by* with the temporal-passage use. These two uses are so similar to each other that they are probably the best candidates in many uses of *by* for a spatio-temporal pair where the temporal use *appears* to be derived online from the spatial use. But even they yield to thorough investigation, and reveal their own peculiar properties which point to the possibility of the temporal knowledge being independent of, rather than derived from, the spatial knowledge. The online-metaphor-computation hypothesis, therefore, does not bear scrutiny at least as far as *by* is concerned.

(ひらさわ・しんや 東京大学大学院)